

パール・バックの *Virgin Birth* について

志 賀 謙

[I]

文学作品の内包する意味の多様性が、その作品に対する評価の一尺度であることは論をまたない。そして、作品のもつ意味の多様性は、作者が意図する、しないにかかわらず、作者の理念に裏づけられて、作品の表面ににじみ出ている場合もあれば、作品構成や、そのために用いられる手法の裏側にひそんでいる場合もある。この場合、作者があらかじめ、それを意識していたかどうかということよりも、作者の手を離れた作品が、1つの有機的世界として、どの程度の深みと変容性を具えているかという方が作品にとって重大である。

この小論は、パール・バックの文学理念に真正面から取組もうとするものではない。また、彼女の全作品を通じて認められる、作品構成や手法を概説的に述べようとするものでもない。短篇に属する *Virgin Birth* という1作品だけを対象にし、作品構成や手法という媒介物を通じて、その作品の息づく意味世界を、作品から飛躍することなしにとらえて見ようというのがこの小論の目的である。つまり、研究対象から離れて、概説的、抽象的な研究に走りがちになるという文学研究のもつ危険を、つとめてさげ、作品自体のスタイルを目的的に追求しようということである。見方を変えていうならば、“Reading Report”の1つに過ぎないものであるが、とにかく、この作品のもつ、1つ1つの意味を作品から離れず、できるだけ深くさぐることによって、この作品自体のスタイルを明らかにするのが、この小論の目的である。

パール・バック (Pearl S. Buck) は人生の前半を中国で送り、*The Good Earth* (1931), *Sons* (1932), 及び *A House Divided* (1935) などの、中国を舞台にした一連の作品によって世に出で、1938年には、ノーベル文学賞を得ている。本論でとりあげる *Virgin Birth* は、中国から帰国後、1934年から1947年にかけて彼女が書いた作品の1つであり、“*Far and Near: Stories of Japan, China, and America*” の題で出版された短篇集の中に収められているものである。

[II]

Virgin Birth は1930年代のアメリカの不況を背景にして書かれている。女教師 Marjorie は、同僚 Philip と相愛の仲であり、結婚の約束までとりかわしているが、不景気のため、なかなか経済的条件が揃わない。しかもふたりとも親を養わねばならぬ境遇にあるので、それが、ふたりの結婚を一層困難にしている。そのうちに Marjorie は Philip の種をやどしてしまう。それでもなお結婚の不可能なことを知っている彼女は、なんとか手をうとうと医者にかけて行くのだが、そこで、もう手術するには遅すぎると冷たく言いわたされる。Marjorie は仕方なく、いよいよ結婚にふみきらねばと決心して、それを Philip に打明けようとするのだが、打明ける直前に今度は Philip の方が突然婚約の解消を申し出る。Philip は、結婚できないのがわかっているときに、そのような関係を続けて行くのは、危険で、良くないことと訴えて、愛に苦しみながら、婚約の解消を求めるのであった。Philip の愛を信じ、しかも彼を傷つけることを恐れた Marjorie は、誰にも打明けず、ただひとりで子供を生もうと決心する。医者のおすすめから、夏休みを利用し、夏期講座受講の名目でシカゴに出掛けた Marjorie は、そこで、ひそかに、出産を済ませる。しかし赤ん坊は、母の顔を見ることもなく、すぐに養子として他人の手にわたされてしまう。このような、女にしか経験できない悲しみにも耐えて、Groton の町

に帰ると、校長が、彼女のシカゴ行きの熱意をみとめて、給料をあげてくれたことを知る。Marjorie は思わず、

“Has he? I am glad……then I'll have my own children again.”と口ばしる。それは、今まで受持っていたクラスが、昇任の結果、そのまま高学年に進級しても、受持つことができるという喜びの言葉であったが、それはまた同時に、既に人の手に渡った自分の子供に思いをめぐらしながら、今度こそ結婚して、自分の子供をもつことができるようになるかもしれないという喜びの言葉でもあった。

Virgin Birth というテーマは、昔から多くの作品を生みだしている。これは、聖母マリアの無原罪の懐胎という *Immaculate Conception* によって、キリストが聖母マリアから生れたとする処女生誕説であることはいうまでもない。そこには、神と女性マリアとの関係があるだけで、男性はこの生誕には全然関与していない。

Pearl Buck の *Virgin Birth* も、Marjorie が、社会的には正式に結婚していないという点で *Virgin* であり、その彼女の懐胎という意味にとれるが、それは余りに皮層的な解釈といわねばならない。ここではむしろ、無原罪のマリアの運命に通じる *sinless Marjorie* に焦点を合わさねばならない。愛すること、これには罪はない。愛したが故に、Marjorie が得たこのくるしみは、彼女の罪から生れたものではなく、彼女をとりまく社会から投げつけられたものに過ぎない。ただ愛したが故に、くるしみをひとりで耐えねばならなかった Marjorie、そこには、現代社会機構、特に経済機構のもつ反人間性に対する作者のアイロニーが感じられる。また、彼女が Philip に打明けることも、まして彼から助けをうけることもなく、ただひとりでくるしみに耐え、さびしさにうちかって子供を生まねばならなかったという点で、この *Virgin Birth* は女性のもつ力強さ、高貴さを象徴するものとも思われる。

しかし、女性のか弱さの背後にある強さ、高貴さを象徴し、同時に、愛と現代社会機構の背律をテーマとした作品は何ら珍しいものではない。問題は、このようなテーマが、どのような作品スタイルの中に昇華しているかということであろう。

Marjorie は非常にさびしく不安な状態にある。彼女にとって妊娠ははじめての経験であり、それだけでも耐えられぬ不安におそわれる。しかも結婚前のことだけに、社会に対する思惑もあるし、Philip に打明けて頼ることもできない。更に Philip の愛情も、信じてはいるが、それでもやはり心配になる。また自分の子供に対する愛情もたちきらねばならない。

以上のような、テーマや、女性特有のか弱さ、微妙な心のおののきが、*Virgin Birth* に於いてはどのような作品スタイルの中で効果的に表現されているのであろうか。そしてまた、どのような手法によって、この作品の意味が倍加され、多様化され、そして普遍化されているのであろうか。

[III]

この作品では、Marjorie ひとりに焦点があわされ、そして無意識の層から彼女の意識面に浮びでて来る、女としての苦しみや、子供に対する愛情が、そしてまた妊娠からくる不安定で、川面の様な Marjorie の心の状態が、回想形式や意識の流れの手法によって効果的に表現されている点がまず注目をひく。この作品は映画でいう narrative のカット数が 16、つまり、物語の推移は 16 の場面転換によって行なわれている。しかし、その narrative の場では殆んどの場合、回想場面が挿入されており、そのため narrative の流れが随所で、何の予告もなしに寸断される。まず Marjorie の視点から、現実の状景があたへられる。そのうちに、その現実の状景の、ちょっとしたものが動機となって、Marjorie の意識は回想にすべりこむ。そこから作者は序々に Marjorie の意識の奥に入りこみ、女性特有の感覚を踏台にして連想の世界を拡げて行く。そして、読者が、Marjorie

の意識内の世界にすっかりひたりきった頃、突然、これも何の予告もなしに、前の現実の状景につき戻される。

She (the woman) looked at Marjorie piteously. "Is the doctor nice?" she whispered. "I'm awful afraid."

Marjorie was picking up her papers. *Waiting so long, she had been able, almost, to finish correcting her arithmetic papers. She could go to bed early to night. She would tell Philip when he called that she had a headache. She'd been having headaches lately, it was true enough. "Marjorie, you look all pulled down," her mother kept saying. "It's only spring," she had answered listlessly.*

…… "he's nice enough," she said to the woman. "You needn't be afraid." *The doctor had been nice enough, a new doctor who did not know her, for of course she could not go to old Dr. MacGrath, who had always known. He had been quick and brusque……she was glad for his cold clean eyes that had never seen her before. "Unmistakable," he had said. "Too late—three months along, I should say. …… Next, please," he had said to the nurse, stripping off his rubber gloves.*

"I'm afraid I'll die!" The woman's dead gray eyes suddenly shone with living tears. She swallowed hard and blew her nose. "No that I have anything to live for," she went on, her voice broken, "I haven't anybody—not chick nor child—I always said if I'd only had a child!"

"Yes," said Marjorie quietly, "it would make a difference." she was drawing on her gloves. *She wanted to get out of this sad room, …… (1)*

上の引用文は、Marjorie が妊娠に気づき、はじめて、見知らぬ医者を訪れて、妊娠3ヶ月と宣告された後、心を傷めながら、その待合室を出ようとした時の状景である。イタリックの部分、Marjorie の意識の開示部分である。

物語は過去形で進められるが、内的意識の開示の場合には、大部分が回想形式を通じて行なわれるため、ただ過去完了形で読者をチェックし、それから Marjorie の心理的過去にさそいこむことが多い。(Waiting so long, she had been ~, The doctor had been ~,) そして内的独白 (第

3人称の視点が維持されている点で *indirect interior monologue*) が続き、それによって Marjorie の意識が開示される。したがって、回想若しくは連想という、内的意識が開示される個所では、すべてが、過去完了で表現されているわけではない。回想の次元の中であって、感覚を踏台にした連想の世界は、当然不規則な時制の使用を強制する。Marjorie が回想の世界の中で感じる被叙述体への距離感によって過去形が用いられたり、或は過去完了形が用いられたりする。つまり、それによって、Marjorie の意識世界は、ひろがり、深みをあたえられているともいえる。これは、とりもなおさず、読者の意識を対象に近づけたり；或は遠ざけたりするという直接的効果を持つだけでなく、更に読者は、作者から課せられた、このような深み、ひろがりという意識面での運動によって、自分の想像面での *fictional* な次元を自然に深めて行く。また、回想場面に於ける過去時制には、意識面に強く映じる歴史的現在の用法やあるいは意識内の想像的発想という元来が現在形であるべきものが、作品の時制的限定のため過去形となって表われる場合や、単なる過去を示す場合などがあって、そのいずれも、*narrative* に於ける過去形とは違った感覚を要求していることも見逃せない。次の引用は、回想部分だけの引用であるが、その中で過去の及び完了時制の使用が複雑な効果をあげている。

Death! There *were* things in life so much worse than death. The words (death) *came* like an echo. Where *had* she *heard* them? She *thought* a moment and *remembered*. Her mother *had said* them to a neighbor. They *were sitting* by that day in Christmas vacation, that bright and wonderful day when she and Philip *had*.....*had*.....*been* to the island. She *had come* into the house at sunset, warm, excited, and tranquil together. The sky, when she shut the door, *had been* pellucid with the clear cold twilight—a not a cloud—and there, behind the flat Wisconsin horizon, there *was* a long orange bar of sunset.

“..... No regrets?” Philip *had asked*, staring down at her before he

opened the door for her. His young, too-sensitive face *was tense* with waiting for her reply.

"Glad……glad!" she *had said*, her face brightly upturned. He *had bent* to kiss her quickly.

"Wife!" he *whispered*.

"Husband!" her lips *had framed*.

"We are husband and wife," he *had said*, binding the words together.

She *nodded*, and *slipped* into the door. Out of the sitting room, her mother's voice *came flatly*, "But I always say, Mrs. Smith, there's even worse things than death." …… (2)

このように多分に心理的手法が用いられておりながら、それでいて作品に強力な秩序が見られるのは、1つには視点の統一によるところが多い。**narrative** にしても、回想にしても、すべて、**Marjorie** が中心であり、それだけに **narrative** から回想への移行も、或は回想から **narrative** への復帰も、ちょっとした動機で行なわれ、そこには何等叙述的な **suggestion** もあたえられていないが、比較的スムーズな場面換転が見られる。

さらに、この作品に安定した秩序をあたえているものとして、作者の、**conventional** な小説作法との妥協がある。“意識の流れ”のような心理的手法を多分に使っているが、**Pearl Buck** が、その手法の実際的追求に終始することなく、あくまでも、従来の小説形式に対する効果的な1手法として用いるに止まったこと、これが1つの力となっている。すなわちこの作品には、確かに意識の流れの手法が縦横に使われており、そこには、**represented speech** や **interior monologue** 更に **soliloquy** なども見られる。そして、題材そのものが容易に理解され、しかも短篇という利点を持っているために、まるで恰好の“意識の流れ作品”のテキストの如き感すら与えるのであるが、反面そのかげにある、先にのべた月並みな程のテーマとプロットが案外に強力な統一を作品にあたえているのである。作品の前半に於いて効果的に、しかも多彩に心理的手法を用いていた作者が、後

半に進むにつれて Narrative を多く用いていることは、手法の統一性の点から、作品に弱点をあたえているともいえるかも知れないが、回想場面の度重なる挿入によって生じた読者の心のサスペンションが、快い速度で氷解し、作品を1つの意味世界として結実させている点では、成功している。

このような作品としてのスタイルの点から、もう1つ注目されることは、回想場面内での深み、ひろがりの運動と共に、交互にあらわれる narrative と回想が読者の心につくり出す fictional な立体感である。読者は、回想場面の中で、現在から過去、過去から未来へとふりまわされる。この種の回想場面の特徴は、主人公の mood を間接的に表現すると共に、読者を広い時の振幅でふりまわすことによって、多くの事柄を総括的に、しかも一時に、表現し、読者に開示出来ることである。しかしこれらの回想だけで終わってしまうのなら、論理的なつながりの薄い多くの事柄のよせ集めにすぎなくなる。しかし、*Vigin Birth* の場合、交互にあらわれてくる narrative によって、それらの事柄の1つ1つに順次 fictional な生命があたえられて行く。読者は、現在の時点に立ちながら、意識が過去にもどったり、過去から未来に飛躍したりして、作品の流れに応じた理解に達することは難しいが、narrative, 回想, narrative, 回想の繰り返しのために、作品の後半に達すると、多数の事柄が同時に、しかも個々別々にではなく、互いに関係し合いながら表現されているのを知り加速度的に、意味世界がひろがり、充実してくるのを感じるのである。

[IV]

社会的にはゆるされない妊娠という事実によって社会から孤立し、その孤独感から、そしてまた、未だ経験したことのない出産をひかえて、心身とも不安定になっている Marjorie の心理は、この作品で大きなウェイトをもっている。Pearl Buck はこの点、女性らしい細かい感覚で、その描出に成功しているが、その成功のかげに、以上のべた心理的手法をはじ

め、幾多の手法が試みられている。

まず、作品の導入部が医者待合室であるということ、そしてこの第1の情景が数多くの回想によって分断されていること自体が、Marjorieの不安な心理を、そしてさらに彼女の豊富な精神内容を間接に、読者に暗示している。このMarjorieの持つ豊富な精神内容が何であるか、そしてそれらのものに不安という彩りをあたえているものが何であるかということがまだ読者に明示されていないだけに、この冒頭の効果は大きい。さらに、その回想場面に於いては *interior monologue* によってMarjorieの不安な心理が効果的に間接描写されているだけでなく、現在のMarjorieがおかれている外的なリアリティが、作者の介入なしに徐々に開示されて成功をおさめている。次の引用は、*waiting* の *mood* が効果的に出されている、作品の冒頭である。

Marjorie Bair came out of the doctor's office, into the waiting room. The same three people she had left there looked up at her quickly. They had been waiting for her to come out so that they could take their turn. All the time the doctor was making his examination she had thought of them now and again,—they would be so tired waiting. She had waited so long herself. Nearly all her holiday afternoon had gone into waiting—precious day, when she might have been with Philip. Philip had wanted her to go down the river with him to their little island. It was barely spring, but all winter there had been fine days when they had gone. But this was the finest day of all. Philip could not understand why she could not go. And she had not made up her mind whether or not she would tell him. (3)

このように、冒頭で暗示されたMarjorieの不安と、その精神内容は、回想場面の内的独白によって、徐々に姿をあらわしてくる。

The woman shook her head. "I know I have my death in me," she said heavily. Death! There were things in life so much worse than death. The words came like an echo. Where had she heard them? She

thought and remembered. Her mother had said them to a neighbor……(4)

この待合室で、或る女の患者の口をついてでた 'death' という言葉が、不安定な Marjorie の意識に連想を呼び起す。There were things in life so much worse than death. というのは、引用(2)で示されている通り、過去に母がその友達に話していた言葉なのだが、この場合 birth (life) をひかえて、Marjorie が無意識の内に発した内的独白でもある。この言葉から発した Marjorie の回想と連想が、読者にはじめて、この作品の舞台と Marjorie の立場をおしえてくれる。すなわち、彼女と Philip の関係、父が死んで母とふたりっきりの生活、不況のこと、父の死、遺産、Philip との出会い、結婚の不可能なことなどが、叙述は並列的ではあるが、連想の効果から、立体的に読者の意識にきざみつけられる。

さらに、この連想のあり方が、Marjorie の心の傾斜を示していることも忘れてはならない。すなわち、ここでは、death を key-word にして連想がはじまるが、この連想は何度となく Marjorie と Philip の関係に帰ってくるという、音楽的構成を持っている。つまり作品の舞台が連想によって呈示される一方、その舞台の主人公も、その連想のあり方によって呈示され、Marjorie の意識の中心を占めているものが何であるかが読者に暗示されているわけである。(引用(2)参照)

又 Marjorie が医者を訪れて妊娠であることを宣告され、手術することも遅く、もう生む以外には方法がないことを悟って、家に帰り、母を遊ばせてから床につくのであるが、その床の中での回想もまた、社会から疎外された不安や、Philip に対する不安、結婚への希望などをめまぐるしく流出させて、彼女の不安を象徴している。Pearl Buck はここでも represented speech, interior monologue, soliloquy などを用いて、loneliness を基調にし、Marjorie の意識内での外的リアリティのふれを描いて、彼女の不安を暗示し、知性にはなく、感性に訴えるような見事な passage

をつくりあげている。この部分に見られる繊細さは、やはり女流作家独得のものであろう。

先程述べたように、作品の前半には、心理的手法が多く用いられ、導入部として **Marjorie** の意識の開示に成功しているが、展開部に於いては、大部分が **narrative** の形をとっている。しかし、その **narrative** の中にも、短い **interior monologue** や **represented speech** が時々顔を出しては、**Marjorie** の意識をのぞかせてくれて、描写の平担さをすくっている。終結部に於いてはふたたび、回想が多く用いられている。

以上述べたような構成や心理的手法に加味して、さらにコントラストが、効果的に用いられていることも注目される。この作品の主題は、不安にさいなまれながら *Virgin Birth* に耐えて行く **Marjorie** の力強さ、高貴さであるが、その与件である生命というものを見落してはならない。**Pearl Buck** は生(命)に対峙させて、女性のもつ強さ、高貴さを強調する。しかも、この場合、それらをより強く浮き彫りするために、不景気や、**Philip** との関係、そしてまた夫に先立たれ、さびしさから異状な程狭隘になった母の執ような愛情といったものを **Marjorie** に投げつけている。これらは **Marjorie** の限定条件として、主題の女性の力強さを表現するのに役立っているが、同時に、彼女の意識面に充実感をあたえている。そして、意識面の充実した **Marjorie** をすぐそのまま生命に対峙させるのではなくて、作者は、作品の前半に於いて、彼女を死といういわば (一) の **mood** の中に泳がせることによって、そこにコントラストの効果をねらっている。自分の体の中に、あるいは新しい1つの生命が生れつつあるのではないかと不安に思い、訪ねてみた医者その待合室で、**Marjorie** かまのあたり見たものは、死を体内に宿して自分の番を待っている患者たちの陰うつな顔であり、子供がないために死をおそれている女の悲しみであった。

She wanted to get out of this sad room, where the woman sat waiting to be told she had cancer in her breast, where the coughing, haggard, middle aged man waiting to be told he had no lung. ……

The woman shook her head. "I know I have my death in me," said she heavily. "I don't know why I care ……." ……Death……(5)

そして引用(4), (2)のように death を key-word にして, 待合室での意識の流れが始まるわけなのであるが, その意識の中心は, この (-) の mood にいささかもおかされない, 彼女と Philip の愛という (+) の意識であった。

さらに, 回想と現実をコントラストで結びつける場合もある。

「まちがいありません」あの医者が云っていたわ。「3ヶ月ですね。……もう遅すぎますよ, ……次の人, どうぞ」あの医者はゴムの手袋をぬぎながら看護婦に云っていたわ……「あたしは死ぬのがこわいんです」女の人の死んだような灰色の目がはじめて急に生き生きとした涙でひかって来た。女の人はやっとのことで涙をのみこんでから, すすりあげた。「いやね, なにも生甲斐があるというわけじゃないんですよ」……女の人は声をつまらせながら続けた。「あたしには誰もいないからなんですよ。子供もいやしないし。あたしは, いつも子供さえあったら……とっていたんですよ」

「そうですね」とマアヂョリは静かに答えた。「お子さんが, おありになれば, それあちがいますとも」彼女は手袋をはめていた。この悲しみに溢れた部屋から早く出て行きたいと思った。

これは引用(1)の邦訳である。待合室に於ける Marjorie の回想が丁度 narrative に移行の場面であるため, 引用では文意がはっきりしないかもしれない。「あたしは死ぬのがこわいんです」とい女の人の言葉で, Marjorie は突然現実にひきもどされる。医者がひややかに「次の人を入

れてくれ」といいながら、ゴムの手袋をぬいだ、その手袋のイメージが、まだ読者の頭から消えぬうちに、Marjorie は女の人のやるせないくり言をきいて、このみじめな部屋から早く出て行きたいと思って、手袋をはめていたのである。この手袋のイメージが narrative と回想のコントラストを一層深めている。その外、Marjorie が不幸になるのをおそれて、なんとか子供をうむまいとしているに対して、この女の人は子供に恵まれないが故に、一層死をおそれている点や、また、先にものべた終結部に於ける、“my own children” のもつ対照的な意味の二重性など、この passage に限らず、多くのコントラストがこの作品にみとめられる。

なお、ついでながら、中国で40有余年を過した女流作家としての Pearl Buck が東洋的な陰影を作品にあたえている点も見逃せない。この作品の設定、つまり、この種のいくつかの限定的状況の中に女性を置き、その反応で女性を描こうとした Pearl Buck の方法は、それ自体、洋の東西を問わず文学作品に見られることである。しかしこの Marjorie の限定状況に於ける意識・行動は多分に東洋的といえる。与えられた状況に反撥したり、外に解決を求めるのではなく、ただ自分1人の問題として内に解決を求めるといった Marjorie の生活態度、そしてまた、母の執ような愛情に嫌悪を感じながらも、母のさびしさをまぎらわすために、故意にチェッカーに負けるといような感受性など、それらに40有余年にわたる、作者の東洋との接触の影響を見るのは、行きすぎであろうか。

以上、*Virgin Birth* に於ける構成と手法を主にとりあげてきた。意識の流れのような心理的手法が、現代小説の特異な手法であるとは言い難い。これは何も現代に限られたものではなく、古くは Shakespeare の “To be or not to be” もまた、Hamlet の性格・意識を開示するのに用いられた心理的手法の1つといえる。ただ現代では、外的なリアリティよりも、人間の意識という、つかみにくい領域に重点がおかれるために、現代になっ

て特にその手法が大きくとりあげられるようになったわけである。その点から考えると、*Birgin Birth* は、果して Marjorie の意識が描写の中心であるのか、或はまた、Marjorie か心の中で、“The wrong was laws which were made against life. But life knew no law except its own right to be.” と叫んでいるような、人間と人間がつくりだす関係、その関係が持つ社会的意味が作品の中心であるのか、何れとも云い難く、何れの面も充分には追求されていないように見える。この点が作品の弱みともとられるかも知れない。しかし、逆に、そこにこそ、この作品の資質が認められないだろうか。関係性の追求という外的な追求だけに終わってしまうわけでもなく、又逆に、心理面での実験的な試みに終始するのでもなく、短い作品に、両者を適当に調和融合させている点こそ、この作品に、スケールこそ小さいが、秩序ある意味世界をあたえるものではなかろうか。